





拾遺	熱田歌仙	依波集	續猿蓑	你川集	炭俵	猿蓑	心止こ	曠野	冬の日	袖珍抄附合歌仙之部卷一 古終舎黙池輯
三十七丁 六卷	三十四丁 三卷	廿四丁 十卷	二十丁 四卷	十七丁 三卷	十三丁 四卷	九丁 四卷	七丁 二卷	六丁 一卷	初五丁 五卷	

目録



冬の日



夕の日 夕文略

ねむらじの身林林水底
 たそやとそくさる茶山茶
 むめのみあは海を流るる
 うらたおとあふ赤る重五
 朝解のほそく遠れ白ひき
 日のちりくまゆふ茶と外
 我危い海ふ相りあはて
 髪くやまゆを思ふあはて
 つらふははらしと氣流るあは
 きえぬ車持候まよとほ
 けんくのまをく火を煙て
 何ぞいふあふたえし
 田中ねるふん扱者まよ
 芳子あひひく人あんま
 黄巻と扱る病るあはし
 隣さかし土町あはら
 二八ふを清のまのま
 輝くむくふとあはら

五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水

ニラ

葉物ふさふさく秋おほる
 いまを昨の矢とあはつ
 空人の記念のねの吹おき
 志まふ一葉被れあはれ
 笠ねまてあはれまよ
 あはれまふくひく夜直
 ちりくと舞けい人の骨
 鳥成りあはれあはれ
 何ぞあはれまふく
 秋あふ一葉もつるあはれ
 日東れあはれあはれ
 巾ふ木撞まふくあはれ
 是れあはれまふくあはれ
 其子鏡の魚とあはれ
 赤杉のあはれあはれ
 りあはれあはれあはれ
 後ひくあはれあはれ
 廊下あはれあはれ

五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水 五 分 園 水

冬の日 玉ものし事
 初雪ふりし 橋竹の雪 時水
 中より手こりて 舞花の會 杜園
 好菊まきける 梅の枝をて 菊
 うつらゆけし 車引り 荷子
 唐の月神に 精散る 正平
 桜花をとり 貞徳の富 正平
 有るは 海邊の 園 四
 夷にまき 花を 水
 床をけて 終る 兮
 孫のまけの 根の 存
 口を 痛とちき 水
 明日かきき 送る 五
 小の友と 重とら 菊
 月を 逢ふれ 牡丹 四
 孫あみの かつり 五
 こそく 地の 切 子
 土の花の 早と 園
 壳の 花を 水

三十一
 梅竹の 海まの 園 兮
 うつら 舞花の 會 水 兮
 好菊まき 梅の枝をて 菊 五
 うつらゆけし 車引り 荷子 四
 唐の月神に 精散る 正平 五
 桜花をとり 貞徳の富 正平 四
 有るは 海邊の 園 四
 夷にまき 花を 水
 床をけて 終る 兮
 孫のまけの 根の 存
 口を 痛とちき 水
 明日かきき 送る 五
 小の友と 重とら 菊
 月を 逢ふれ 牡丹 四
 孫あみの かつり 五
 こそく 地の 切 子
 土の花の 早と 園
 壳の 花を 水

あけ日 田家賦中

春月や静のつくし 雲ひけて 露
 冬乃竹日のあるはくらく 露
 櫻枝山家の屏と木の繁陰 五
 ひまを侍中の瞳をなまけ 杜園
 音もゆき具はうまはぬも 柳堂
 物と糸を糸切しつゝ 柳水
 秋の夜橋の遠きつゝ 柳
 樹と枝く富士足ある寺 兮
 寂しく七枝のむれはるゝ者 園
 茶と糸やゆきをむるはる者 五
 雛子遊ひま鳥帽を女三子 水
 庭ふ木を侍のひの落ぬ 笠
 友つた山橋より橋を人せ 兮
 麻うらとつて身は糸あむ 露
 ひとをかく物糸を糸糸糸 五
 糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 四
 糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸 水

三

骨とてそちを月を打て 露
 ち念の善を善と志の先 兮
 涙は止るも心解を結ひて 園
 御幸小をむむ水のみをり 五
 静さるる月の小菊豆はもり 水
 萱をまわす小糸をまつく 笠
 け花の小地まふ小打むれ 兮
 切つて是の更なる是の舞 露
 静さる飯煮のそく月れお 五
 庭おく物糸やうれくお 園
 物枝とを結つれくをけ鹿 笠
 豆磨けつて母れ喜入 水
 之政の草れ枝も破ぬ下 兮
 伏見本橋の静く水も糸 露
 色深き男猫ひつゝを撫つて 園
 春は去りし風の香掃をよ 五
 水手を去る白れをよやふ 水
 山糸糸白く糸糸糸糸糸 笠

廣野 海川の歌

厚吉も船をきけいふまや 越人
 海吉もあゝ此のうれ月 人
 昔も海津の鶴屋にあつらん 人
 程をよほさる秋の夕立 人
 新葉の大ききるらん 人
 如く吹飛く海風市人 人
 何れも七あつこれ名刺の地 人
 医はあまや自らるや 人
 いそぐと海吉のそふま出て 人
 ひより母信やくち代物より 人
 は甲ふ古記を昔はあま 人
 思はせりやせぬるあけあ 人
 きぬやあまかちそくはま 人
 風はあまをたふらん 人
 もれいそくはあまのあま 人
 月とあまはあまのあま 人
 中をたふらんあまのあま 人

三

破さたの釘うち付る末
 みせの沸きき夏の抜刻
 画ふくて投沙うつむす淡
 物おしいあまのあま
 人あまのあまのあま
 初来はあまのあま
 何れもあまのあま
 植穂のさけあまのあま
 あまのあまのあま
 何のあまのあま
 月あまのあま
 きぬくもあまのあま
 秋のあまのあま
 さのあまのあま
 いちやくあまのあま
 誰かあまのあま
 糸のあまのあま
 田あまのあま

ひさこ 不尼

本城より出たかきも様れ 石
西日のごうも能て石なり 瑠璃
松人其れまきのまられて 曲水
くはなまらむねなる緒 石
月乎ちて候の内裡代目石 硬
物廻つて居極りやう石 水
舞臺より集納したる石 石
名をさすてし降りる石 硬
入はは縁流の涌りたて石 水
中やせいのまよふ伏 石
いふやとほ一かた石 硬
細く節り懸つたり石 水
物よふより物とせり石 石
月入る鳥の神妙り石 硬
秋風の船と怖らた石 水
しらくや白子あり石 石
ふれむよみは雲の一石 硬
巡行する石のくけり石 水

三ツ 仍も様れつて石なり 石

みかくちま力なり石 硬
静け目せといふ石 水
態神見たりは石 石
い本弓紀の突ちり石 硬
渾て一丸ももあ石 水
双を以て歌く石 石
かりの持松いむ石 硬
中へ玉置に折れ石 水
我名に申れわり物 石
小をれやぬ清の行石 硬
月抄 工ぬわら石 水
くをわらわ折石 石
たら四力なる石 硬
一貫代清石 水
一医者の茶の石 石
ま掛けい石 水
此くさる石 硬

格書

市井のの自由や 妻は月 九兆
 あつらひと門ののき 兆
 二番竹ともも 墨は粒子 兆
 一尺くらたぐくう 丈一 兆
 けふと鉛も足 ちるき 兆
 たくさひやし じと 兆
 美ひつふ 姓こころ 兆
 美のきとく 兆
 なるんれお 兆
 能也の七尾 兆
 魚は骨志 兆
 清のく人 兆
 立うり 兆
 何友の 兆
 苗香 兆
 清やと 兆
 精の 兆
 年一 兆

三
 三六 兆
 足んや 兆
 下推 兆
 方 兆
 入んや 兆
 三 兆
 春 兆
 中 兆
 若 兆
 最 兆
 二 兆
 三 兆
 何 兆
 所 兆
 身 兆
 来 兆

花巻

厚の桶の米やみりきりも 九兆
 わらわらりて宵持を秋 兆
 秋をさありしころ月影に 兆水
 なして婿しつろのつらよ 兆
 子代少き物さきあしははれ 兆
 若くはあたりりしつら 兆
 若かりし物て花よあまる若 兆
 十郎をさる船しつのかさる 兆水
 夕飯よかすまそく人かきる 兆
 極のり知とあきそ味はた 兆
 物さひらきあきそわて体不 兆
 年ひせりき春よりはあ 兆
 産澤とくふゆをさのあき 兆
 あつ風呂好きのあきの月 兆
 町内の林もよりぬやき 兆
 何とんや中あけつりぬ 兆
 茶とちる身い申念のあき 兆
 本町の雄をさすもこれ 兆

三
 夏より山陰つら四つり 兆水
 紫まきと家の梅をかりる 兆
 冬をわわわるるもあき 兆
 娘の絶えまよるぬ 兆
 正中一き女智恵もあき 兆
 かねたせしつら花のぬ 兆
 冬月お花は道程のあき 兆
 人もりて絶あつそああ 兆
 鳴りまよる梅をさすはあ 兆
 せも大りの絶とより物 兆
 悦うら曲のあきとつら 兆
 かねの社をさる社なり 兆
 三
 おまはれ尻をさくもあき 兆
 白れやとらたはたはあき 兆
 屋持つるもあきのあき 兆
 志しあつるもあきのあき 兆
 冬梅後一ふもあきのあき 兆
 冬いふ月あけぬはあき 兆

猿蓑 信子己巳年秋

梅のまきやうき霜のころ山
 笠あつしきまのあぢあぢ
 中夜も小甲よもつはなれや
 志とき程定しきれはう
 行揚ふも遠くそこの月
 二社のあつたまきこ秋
 散やう霧のひらきんせき
 福代葉のひれ力あきん
 ぬんぬんあぢあぢ
 内夜改うそあぢあぢ
 卯の糸のあぢあぢ
 きぬきるねあぢあぢ
 萩のれあぢあぢ
 すんすんあぢあぢ
 懐きあぢあぢ
 はあぢあぢあぢ
 後の柳まきあぢあぢ
 月あぢあぢあぢ

ニラ

あぢあぢあぢあぢ
 行あぢあぢあぢ
 大あぢあぢあぢ
 小あぢあぢあぢ
 柳あぢあぢあぢ
 らあぢあぢあぢ
 狗あぢあぢあぢ
 けあぢあぢあぢ
 柳あぢあぢあぢ
 吹あぢあぢあぢ
 風あぢあぢあぢ
 鹿あぢあぢあぢ
 史あぢあぢあぢ
 水あぢあぢあぢ
 水あぢあぢあぢ

積善

孝れぬも利ぬ神、貧素
 一ふきぬれ木の葉もあまる 邦
 殺しの物もぬれ川に流る 邦
 たぬきを怖る藤波のうら 邦
 海ら戸上考遠うら雷は月 邦
 人平もくれを名物の梨 邦
 出なくる雲は地く林は木 邦
 と死んふき老うやまは星 邦
 何のいほきあうら神あり 邦
 甲入てそのく平は貝く 邦
 何のいほきあうら神あり 邦
 黄黄はたぬれあうら 邦
 吸物いんあまきぬれあま 邦
 乙里阿すうれたか人き 邦
 び花も庭回る男指あうら 邦
 ち一本つきたる月の紙衣 邦
 若ぬくふまあうらうら 邦
 ひとらあらしと物のは立 邦

三才

一何う二日月のちんちん 邦
 空も丸くまをふまぬれ 邦
 火のいほきあうら 邦
 時をいほきあうら 邦
 夜寝るはすうら 邦
 佛さうりく車ひきこむ 邦
 うき命を根敷垣うら 邦
 今やあまきぬれ刀ゆ物 邦
 せうはまきぬれ刀ゆ物 邦
 皆い切く死んふら 邦
 善もいほきあうら 邦
 けられ秋のけられ 邦
 此世のいほきあうら 邦
 布子もあまきぬれ 邦
 押弁もあまきぬれ 邦
 たられぬもあまきぬれ 邦
 一うら熱つくるあまきぬれ 邦
 枕抱のいほきあうら 邦

炭俵 廿日深川所真

振奮する所ありては之を海に
 ちてしんやとみ可るを。折 飛
 書通す櫃の小節を換えて 紙
 河元山れ月と見らうれ 刺
 好物の餅を流さぬ秋の風 坡
 つり来たれあき園の衣箱 箱
 細のものをうく舟を本立て 舟
 早き入んす廿八日 舟
 ひくまきこくは東にけの之 舟
 法蓮は雲小野籠りせぬ 舟
 ぬらむせし紙灯を衣箱で 舟
 有秘すとも内をの青木 舟
 上皇は千葉刻むもこの事 舟
 馬子出ぬ月いゆく悲なる 舟
 洵羅は七りさうを古條 舟
 堀ふ門あを五十八取 舟
 此處の儼鬼ももをすりぬむ 舟
 砂り吸れ川をまらうま 舟

新島は雲も流つて世の上 舟
 吹とら流るる道とらうしり 舟
 川越しの常しはなせあまら 舟
 手他のちれうを不敷垣 舟
 千物首向れあへいさうせそ 舟
 陸物も路の巻けとくけり 舟
 箕角ふうきまをちる素袋 舟
 中へ海法師一玉 舟
 とくこと大崎りも四の陸 舟
 せ帯れ好む状のあと先 舟
 中よく傍事合の焼きい 舟
 盤をたさそ持せぬあ月 舟
 ぬやそ秋の初めは尻さう 舟
 細れ鳴子の強をひく人 舟
 ちくわらと春の扱場のり参 舟
 圓屋あふれ遠の裾りこく 舟
 とくももむの二月中時分 舟
 掃炭の炭とらうを衣箱 舟

岩依

雪は雲のまはりにけりては
 日れ出る方の赤き空を
 下着せ二舟渡へうらりゆき
 有と伝へて大なる世 枕 子冊
 多しつらなる風もかたはる
 葉さうらねく度き畑地 梨
 態谷の境切る秋のあ 袋米
 第うららと響けうらる 枕
 二と舟を渡りし門の板 冊
 るれあむのさうらうもの 備
 昨の夜書海舟の交はき七 葉菊
 稲よ子のさきと面れとらし 風
 心あなるのむらもは浦秋 坡
 めつとふ風軽れとやる空を 岸
 雪くは月と如らして松大工 依
 岩中へのゆら子とさるる 冊
 葉のゆらゆらとよき葉 冊
 川うららと響けうらる 菊

ニラ

舟を晴て舟味よは船の舟
 宵々へ世をくふくゆくそ
 物さひ只うのくく教うら
 とう集ていふあき時を月 曹良
 餅糸と揃て伝くまのり也 依
 りうくくさる葉代の乳 依
 雪舟でかくは白楊きき道 圃
 陣くかて犬とよて暮る 冊
 浦を舟も伝の伝く伝を伝 冊
 換けしとてかくとあはる 風
 大坂の人よまねるるを月 冊
 海とともれは祖母は年入 坡
 三 ちけぬる海おの流れたらり 冊
 次の小舟をてつふしせる舟 冊
 物米よのみてはれは飯ぶき 冊
 ちつれぬふなるる上なる 冊
 茶はあわすそ南上降世 冊
 田男まやした葉まうゆれ 冊
 水 冊

新巻 徳門まで

中庭の草花よりさうまのふ 孤登
 宵けり難のこゝろ海川 翁
 上流と通るあやの田舎 哉水
 そつと改けし海川 梨
 孫の正しきおぬき 翁
 とくろと海川のそら 翁
 さむくは萩の下の海川 水
 晩のはりけり風 水
 妹とふあつと 翁
 仲村のふと先 翁
 如神の如く 翁
 家の原は 翁
 遊けり 翁
 茶の買を 翁
 けり 翁
 折柳と 翁
 吾れおと吹所 翁
 ふとん丸けて 翁

三

不届きと 翁
 ころち城まを 翁
 後のはらふ 翁
 ちとを 翁
 ちのす 翁
 今れ方 翁
 手首 翁
 息受ふ 翁
 堪思ふ 翁
 名月 翁
 まさ 翁
 けり 翁
 山は 翁
 ふと 翁
 けり 翁
 花 翁
 家 翁
 水 翁

深川集 油川松社

善くても物なるを物と看るは 石
 控く物とさす物に物に物 雲
 西日舟楫の東端行とせく 嵐
 坊まがしらばんこたうとく 水
 松山の傍にじしれはらうとく 水
 焼野の岸を下り川舟 舟
 うまひはけさうらたふまは 水
 舟まつうてはらゆゆ子 葉
 掛をふ懸れんとおせとや 石
 翠翠平ふんとくく下か藤葉 石
 舟と殿と岩を流る舟より 葉
 西岸敷のひ鳥たかきとく 水
 月此流まらんさるまきとや 水
 きあささかりと鏡たさや 石
 時中よ夏花のさの舟舟 水
 舟野の山をたけきや 葉
 弓さくゆすくまきとく 石
 着とりおるまの海く志とく 石

三才

町中此の秋を赤きとんじと 葉
 吹く志とらは神分静する 水
 草草感て地雷鳴中と林葉 石
 伏人わたりれ古の舟月 石
 玉ふけ平者まけいかなや 石
 我のうも心敷あまの 葉
 山依と切くけく雲たお 石
 澄持くこひれくぬ世の中 石
 附合の塔上人を春阿し 葉
 さらりりくとま九さうけり 水
 舟おとれおれはまのりそ 石
 こそとめと何とた大目 石
 三才 撲あけくま田もさく人 水
 蓮行高と藤さけゆく 葉
 舟のたつ地裡橋は石の藤葉 石
 葉葉かく人もおれは雲葉 石
 舟舟舟人おれは雲葉 葉
 舟子れやうくまきや雲舟 石

徳川集 五言律

口切之櫻枝屋をかわりきり
 羊又守り敷のくし川新
 山花れきふぬふき草とし
 秋のせきけは海しうれ
 移人のゆき月れぬり
 大戸と物くさゆき
 新此卵の敷と産ころ
 わくちと揺と海知り
 みさうき守と圓の敷やう
 掛葉をゆくお豆乃け
 細ねるゆきもわか
 寝るふくくう身は乃
 えらうしと揺るく
 海ても含よりあま日
 り中れせつのかと敷
 赤より揺り人一勝の法
 西日入るふれ危の
 崖れ二塔のくしはめく

合 中 葉 木 合 石 果 世 契 雲 雲 木 合 石 葉 木 合 石 葉 木 合 石 葉 木

ニラ

こやこよとよけれの御
 吹くまきとく敷也草の
 咲きあてふの俊も揺す
 られなるくし枇杷の
 凡穿して鉄もぬき
 津けは運をる社家
 日整ふ揺るく
 らつきた猫のやう
 撲黄とみころ門
 皮刺のおきく
 上毛吹く白
 岩つと八
 左刀拵るり
 物きも
 盆盛る
 死に
 麦と

合 中 葉 木 合 石 果 世 契 雲 雲 木 合 石 葉 木 合 石 葉 木 合 石 葉 木

續指義

八九百をて白う柳の事 里
 正れうその島なる事 里
 とうあるらるまぬの事 里
 ゆきとまらく映の事 里
 きのつら日おる事 里
 狗宵うれく机をさる 里
 孫あわく祖父の信 里
 根うれくやう抜刀 里
 味うれくやう如海の人 里
 狗集れくまう三ヶ堂の事 里
 十甲をさる事 里
 遊れ事 里
 何の海うつれと門の出付 里
 心くう後い沙汰る事 里
 やりとう所出る事 里
 むねうけく事 里
 足事 里

二

唐中をさる事 里
 何勢れ下向う事 里
 長持と小者の神事 里
 くわうとやう事 里
 縁さふ一月ゆその砂の上 里
 柳の南はく事 里
 演劇の事 里
 なすぬ嫁まか事 里
 月待の事 里
 難れ事 里
 此れ事 里
 付便事 里
 削やうに事 里
 中つた事 里
 引き事 里
 その事 里
 花の事 里
 水うららの事 里

續松葉

友に松や葉をてのり作ぬる
 赤とららつと葉の松光 豊
 昔の月をいふよまを今 階
 古に華をよま古わし 惟
 自然のまをよまやれ色 香
 志すくつ松をいふまを 香
 松をのりぬいふは 翠
 少くくまをまて出せ
 板植るる面桶まをまを 然
 やまて松をいふまを 考
 叶の事かまをまを 考
 持伴のまをまをまを 考
 季睦まをまをまをまを 考
 秋風いける門の松を 然
 馬車てぬいふまを 考
 尾張てぬいふまを 考
 梅母のまをまをまを 考
 正月のまをまをまを 考

ニ

生民の善法をつりたて 然
 救うる村人ぬき 考
 喰うぬぬもぬもは利く 考
 何それぬき山伏や 考
 筆芭と梅と松と 考
 巖とまをまをまを 考
 おおとまをまをまを 考
 深の甲知まをまを 然
 春とまをまをまを 考
 夏とまをまをまを 考
 秋とまをまをまを 考
 冬とまをまをまを 考
 二カ
 中流つる西東は南の河系 然
 之流とあつる表一固 考
 空けぬまをまをまを 考
 大なるまをまをまを 考
 さかかぬまをまをまを 考
 橋をけつるまをまを 考

續後集

いさみろをきりまゆあしは 里
 むれきまのまかこくま 沽
 大根のそくぬきにふれ 里
 上下のふり草のむ秋 馬
 町切の月人の以のあつ 沽
 ありらりしとむるる次 里
 知恵地れむのゆきつて 里
 ゆくゆくぬけゆりやく 沽
 組れ徳まきとけけ 里
 固利くあふふりて 里
 状物を後河のたけあし 沽
 中てりまあぬ目の新 里
 吾れ兼まきとけけ 里
 伊勢守をよゆりて 沽
 くらねのゆきとまき 里
 むれまきとけけ 里
 柴舟れまの舟まき 沽
 板の傍へ門まき 里

三

吾れ兼まきとけけ 里
 こゆれまきとけけ 沽
 清物のゆきまき 里
 むれあつまきとけけ 里
 ぬきまきとけけ 沽
 けれまきとけけ 里
 巨津まきとけけ 里
 一石まきとけけ 沽
 ねくまきとけけ 里
 げまきとけけ 里
 月けまきとけけ 沽
 おりひのゆきまきとけけ 里
 むれまきとけけ 沽
 ぬきまきとけけ 里
 ぬきまきとけけ 沽
 ぬきまきとけけ 里
 ぬきまきとけけ 沽
 ぬきまきとけけ 里
 ぬきまきとけけ 沽
 ぬきまきとけけ 里
 ぬきまきとけけ 沽

俳諧集

(法もあらき) 春川はあつむれは 藤
 春うれのおらまはくまの舟 田圃
 福もつせぬ秋あはれさき 麦
 之味せん揉く旅れ乞食 白
 夕月おそく豆うて文一匹 圃
 衣さぬくふ秋をきねり 芺
 おもひもて鐘の波はせはのま 菖
 大英の秋の筆をかき 圃
 力ぬく旅をりうたせりひ 芺
 清の甲斐もなき暮海も 菖
 持佛坐の事あつぎらん 圃
 あつぎなきくむる雑糧汁 芺
 けはれ結十二日のお怒り 菖
 伏せね橋も東にふゆそ 圃
 腹たたくて入る舟の揺り 芺
 秋にくと塔の電が 菖
 月夜に雷うら仕也下を至磨 圃
 物さくまて餅はわれり 芺

ニ

鎌あけくく落るるをれ風 菖
 門のひびくりらんさういつ枯 圃
 時代あつ二村面れり通り 芺
 荒瀬うら改色を出入屋丸 白
 鳥ておやとさかおれと云 菖
 雪丸細のれ山さうりやく 芺
 入口に松さあつれ岬鹿 菖
 併法あを神へ文をく 菖
 悪徳の小神に於赤らみて 芺
 異備の茶碗をささき 菖
 たま標れ二世を振るう牙 菖
 月と餅と痴痴をきく 菖
 後り物の一さる又あつむすね 菖
 唄さぬくくさ柚子の切取 菖
 秋のやまきくしら松切共 芺
 春か桂玉の潮あかりや 菖
 不云候にたさく山はゆ三位 菖
 田舎に谷よなまる 芺

佛詩集

佛子らや初秋の月夜に 来
 首のうらみ帷子乃綴 前
 小灯さきまのぬねこみ 流
 錦してまゝる魚けらわの 去
 一雨ふと我もこもる月夜 懐
 只そろくんと宵中打す 来
 おゆと云れぬ人をさひの 前
 手あつらひし出る面の付 廻
 物りけりつ程のりて老れ 草
 名そろくつる是れ小鳥 哉
 夕方気絶置置して三月の 来
 涙うらみ守子乙女はさき 前
 不仏のまゝ欠ぬるありき 廻
 半れ骨してまはれくもや 州
 涙の程のうらみそら敵ゆ 哉
 室れ八面よたつ子遠く 来
 塵雲のさよりの月けさ 前
 啞れまはれまゝのら此等 廻

二

佛の友とありけるまはれの 州
 我少らくまゝのまゝの 哉
 物ハ清きとありて良し 来
 瘡一々ともありて良し 前
 清きつと清き清の古き 廻
 ありて清き清の古き 前
 供ありて清き清の古き 州
 烟けりて清き清の古き 来
 常は井の徳也とありて 前
 ねりて清き清の古き 色
 やさしき清き清の古き 州
 清き清の古き清の古き 哉
 子親と名く清き清の古き 来
 清き清の古き清の古き 前
 清き清の古き清の古き 知
 清き清の古き清の古き 其
 清き清の古き清の古き 州
 清き清の古き清の古き 其
 清き清の古き清の古き 州
 清き清の古き清の古き 其
 清き清の古き清の古き 州
 清き清の古き清の古き 其

依性系

秋まき一風うきまき百草の南 五着
 尖れ中子て戸とくも月 珍頑
 子猫つくとすんもは鬼道魁 之た
 人くくやうまはの教り海 昌景
 播磨も海川は有る 全私 平秀
 もういつたれはははの風 櫻
 番探て取のちんを推すた 頑
 とその形は奴もたえ後 た
 赤くく小難形附の多る者 有
 雷切らる娘らあゆむ 疾
 野て首命抱は年たりや法 左
 恥をしくと悟棄てしめ 頑
 月れあ涙まきうきまきと世 秀
 兼と花ありともは舟人 志
 上は上結ぬすむ白けいけ 房
 月和いむきうまねの物 有
 とくしと極板ぬす花籃 頑
 為ひつれとるまは花 左

三十一

幅なき袖門はくまきまき 志
 羽織もろ中も海ありき 有
 行くくは物取ありま月 左
 兼と体むを名お乃味 有
 母親の仕立てんせり嫁入取 秀
 敷くまき 山と具形山伏 有
 江戸流と持て在はの門より 頑
 妻と煮る身と調和せし 左
 殺引の身と世とせりせられ 志
 青れ少のこ若山生虫 有
 志んくと周の押巻もは月 秀
 んを告る杜れひまより 有
 山嵐は青りまつく風の者 有
 石作の飯とくまきや坊 頑
 情流き波耳は火工勢し 左
 かくはと流まきまの橋上 有
 花の流まきまき花柱花行 秀
 かくくくとまきまき花柱 頑

流社来 おほしきまゝのしほりしは あり
 亦多しとわらふ おほしきまゝのしほりしは あり
 善堅ちちつく おほしきまゝのしほりしは あり
 流社来 おほしきまゝのしほりしは あり
 ともく おほしきまゝのしほりしは あり
 月の影さぬ おほしきまゝのしほりしは あり
 大の虫 おほしきまゝのしほりしは あり
 傘 おほしきまゝのしほりしは あり
 直 おほしきまゝのしほりしは あり
 さ おほしきまゝのしほりしは あり
 お おほしきまゝのしほりしは あり
 の おほしきまゝのしほりしは あり
 去 おほしきまゝのしほりしは あり
 よ おほしきまゝのしほりしは あり
 そ おほしきまゝのしほりしは あり
 ち おほしきまゝのしほりしは あり
 月 おほしきまゝのしほりしは あり
 あ おほしきまゝのしほりしは あり

二
 流社来 おほしきまゝのしほりしは あり
 亦多しとわらふ おほしきまゝのしほりしは あり
 善堅ちちつく おほしきまゝのしほりしは あり
 流社来 おほしきまゝのしほりしは あり
 ともく おほしきまゝのしほりしは あり
 月の影さぬ おほしきまゝのしほりしは あり
 大の虫 おほしきまゝのしほりしは あり
 傘 おほしきまゝのしほりしは あり
 直 おほしきまゝのしほりしは あり
 さ おほしきまゝのしほりしは あり
 お おほしきまゝのしほりしは あり
 の おほしきまゝのしほりしは あり
 去 おほしきまゝのしほりしは あり
 よ おほしきまゝのしほりしは あり
 そ おほしきまゝのしほりしは あり
 ち おほしきまゝのしほりしは あり
 月 おほしきまゝのしほりしは あり
 あ おほしきまゝのしほりしは あり

伝説系

又人技持とて志す者板系 板
 日ありく(上)宮と竹の地と 弱
 猿中(月)とちう(上)山にて
 そららとみけ(雄)とけい
 何とせり(り)とも(め)水(た)立
 法利(る)る(を)歌(を)買(り)
 九(二)年(猿)と(猿)板(と)て
 境(れ)そ(り)た(り)て(せ)の
 志(白)と(松)と(柏)と(名)と(其)妻
 う(き)世(れ)を(た)た(え)て(種)守
 夜(終)工(業)を(一)拍(と)ま
 穀(入)せ(と)ち(あ)れ(を)屋
 甜(味)も(熱)く(り)る(秋)まで
 羽(う)ち(う)ち(月)成
 以(こ)し(て)年(は)証(と)成(る)
 ち(ふ)件(ハ)物(の)と(何)火
 嘆(息)十(十)對(其)妻(流)あ(き)人
 と(や)菜(物)と(捕)く(白)く(る)

三ツ
 さ(ら)り(く)と(と)や(ぬ)あ(ま)る(風)
 猿(は)あ(ら)し(く)ユ(ク)も(ら)し(く)
 り(ま)く(せ)ま(を)子(供)を(重)重(と)ま
 や(き)味(味)は(活)吹(と)ら(ひ)つ
 一(梅)と(や)菜(の)く(一)年(状)
 り(よ)も(形)重(れ)と(う)る(降)
 せ(く)ら(を)葉(ひ)と(中)ま(と)り(取)き
 む(う)此(業)權(と)若(き)や(む)
 市(車)と(そ)と(か)と(吹)り(子)
 神(神)む(し)の(板)う(ま)う(と)の
 月(影)と(小)華(仲)有(は)流(は)速
 若(る)ま(う)つ(地)を(葉)る(れ)若
 ニウ
 と(ら)く(と)相(代)業(者)と(子)水(辨)
 本(付)て(あ)る(空)に(松)考(古)日
 漸(と)か(き)起(さ)れ(て)板(板)り
 猫(可)堂(う)る(人)と(葉)く(き)
 阿(比)美(の)お(ら)ぬ(子)風(を)吹(る)
 等(目)付(く)人(と)色(く)の(蝶)

三十一

流落集

友が成れりか歌候に吾も心お
 せめてすくく一は若れま登 奇香
 神月れ歌を繁くたてて 尚白
 石平のよれまひひく 自矢
 ねれ本を枯風さきふれく 通香
 作をやめて寒の糸ゆる 松洞
 うかれら女に別て月れ移る 香
 矢殺に腕の下をる 鹿さ 孫
 ちる探に古字れ文を控より 矢
 柳れ棠とる春か 柳 電
 ちる春ぬ先より出で雲物 算香
 浮世れ外の傳よりくる 白
 あらし吹雪空をいつる 洞
 杖をまろく小菰並れ春 江山
 船つまふ回く社持まれて 孫
 撲し海の方の行へ流る 矢
 花とて昔野の足まし 白
 るに化つる華れ子に 香

ニラ

麦飯に雪の中く直るん 壺
 されくくさるにれまきく 山
 くの大に遊よりつる松の枝 香
 出よききまふれひく 宿
 乃んれと電無き時 一就
 長れて若の子を捨てり 孫
 中此秋候味好く 雷
 三流りくく教と流れり 香
 うた人と春をさる 白
 大勢あて持ふたくれ女 香
 一帯や二束わたりれ 洞
 変れ子若く守に敵の山風 白
 ころくとをさす 仁
 齒牙とあつて 香
 破時く伯父れ 香
 於れ妹の子と春より 香
 横身じま戸小死の香 香
 よれ若のさる 白

依洛集 春 蘇五郎

仍此事のむも志す白ひれ 蘇
 春小舟日をもくむ黄香 蘇
 本原さほ其れ橋古雪もきて 又去
 二葉大垂清きゆらりり 雪
 其のの若し浅き流し門けし 勝延
 蘇美いさうきおれ中火 蘇
 物柄二麗れかよききて 光
 門細めゆる四代中れ 蘇
 少時事清きよれき能得 蘇
 形小舟とたのび思ひき 蘇
 女は古れ其れ破き言れ 蘇
 其れ付けて泪流し 延
 子そよ酒さるる花抽き 野人
 障れかりなす侍れり 光
 白きその夜もと厚と敷つん 里
 もりぬてゆき國れ和給 菴
 毛の月と流し梅減るるよこて 去
 蘇美いさうきおれ中火 蘇

二ツ

林彼に麗れ其れ流連有 光
 是かよつまらきぬれ彼 人
 蘇種と他のゆめとわらこ 延
 んの勢を遠く都あらんき 去
 たこと及再のゆめとわらこ 菴
 誰れおそくおろくろすし 里
 中かき楽の一日と種え 蘇
 物りけり子の備いさひり 光
 春もきて表表と油と杖の味 去
 志をくく風と新香吹ちる 延
 後をけて夜毎れ月と星の 人
 くらもすさむおれ其れ 菴
 親ひり柔と能ある秋つる 光
 中し物れを系と代守 蘇
 け城をわらきたゆらして 丘本
 ゆらとむ權と舟つれきり 去
 そのよれら流しをわら 延
 経冊のよす林離の蘇 人

全 相葉亭

何れも河や川や雨や葉竹の
 あくは是處で煙きくはる
 四條のつゆも春は河くふ
 乙女よあつ子休れゆる
 月影もされば相叶中法寺
 酒のむ映のいづこ一き
 双ふはうらやまや中長
 翠の凡そむ神のうら若
 数若子侍はるはるはる
 舟のまのあらしはまもの
 やるはる色わの研さくは
 藝者さよとむるさくの
 おりろは枝女の枝はる
 花風をまのふふお四
 川中へ響きを角はる
 今利とるはるはるはる
 かにさるはるはるのま
 相葉の酒とるはるはる

三
 高き女お整おくりやう
 まくらら風風の画は相
 吹きれはるはるのま
 三枝の舟は川乃は
 危後やあつ子休れゆる
 真出たつ子休れゆる
 いちぢ百舌も涙も直はる
 又吸むお伊神おや
 月影もされば山と相
 中へおはるはるはる
 ひるはるはるはるはる
 ひるはるはるはるはる
 三
 男やあつ子休れゆる
 風もあつ子休れゆる
 寺門とつづく生れ乃
 舟は山とつづくはる
 舟は山とつづくはる

全

けしと板を水の袖の中 梨
 花より葉を摘む露の一滴 山
 日乃山雉子の跡を道に尋ね 山
 清き水すくすく流るる月 水
 面白の神工に秘愛の竹の上 山
 高き崖より探子と探ふ 山
 舟渡しの船の連をまはして 山
 雪の大地に三井の清き水 山
 水と徳の流るる神をまへ 山
 探子の影を四五百の空 山
 松風の空に酒をまはして 水
 伴をまはして西谷の峰 山
 鳥の巣に寝る女をまへ 山
 鹿をまへてゆく神の月 山
 秋の夜に味き物言ひ 山
 白き花をまはして芳の海 山
 清き水すくすく流るる 山
 陰をまはして神の影を 山

三十一
 花をまはしてゆく神の月 山
 鹿をまへてゆく神の月 山
 秋の夜に味き物言ひ 山
 白き花をまはして芳の海 山
 清き水すくすく流るる 山
 陰をまはして神の影を 山
 鳥の巣に寝る女をまへ 山
 鹿をまへてゆく神の月 山
 秋の夜に味き物言ひ 山
 白き花をまはして芳の海 山
 清き水すくすく流るる 山
 陰をまはして神の影を 山
 鳥の巣に寝る女をまへ 山
 鹿をまへてゆく神の月 山
 秋の夜に味き物言ひ 山
 白き花をまはして芳の海 山
 清き水すくすく流るる 山
 陰をまはして神の影を 山

拾遺

牡丹露つゆとくくひとくほろけり
 於月涼ひやくあの玉は将相葉
 空宮みや中ちゆうあのききあのちちけり
 たたりりくく踏ふまはひひててききるる
 新あらた家け根ねあのけけののもも木き
 二ふた百ひゃくちちひひううるるろろろろ乳にゅう
 たたががささいいりりののああををけけりり
 涙なみだううるる他たのの人ひとううけ
 竹たけ峰みねののすすききののささきき
 扇あふぎののああををけけりり
 手てあありりててききああるるのの葉はうう茶ちや
 かかららんんののううららままははななをを
 ううすするるききああるるききああるるのの扇あふぎ
 服ふくののううららひひののきき
 ううららひひととききああるる海うみのの邊へら
 谷やささののううららままははななをを
 花はなののううららままははななをを
 葉はののううららままははななをを

ニラ

生なま代しろのの橋はしううららままははななをを
 多おほ時とき此こゝ日ひ何なにとといいふふかからら
 垢か雷らい火かとと遊あそぶぶ酒さけのの味あじをを
 湯ゆにに樹きををききりり枯かりり
 情なさけ心こゝろののああららままははななをを
 ううららままははななををききりり
 相あ索そく盡じんれれるるむむむむひひてて扇あふぎ
 筋すぢれれとと念ねんののああららままははななをを
 物もの賣うのの杖えんぎへへああららままははななをを
 紙かみののああららままははななをを
 梅うめ塘ぢやうののああららままははななをを
 竹たけののああららままははななをを
 振ふるるとといいふふももううららままははななをを
 葉はああららままははななををききりり
 物ものののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを
 湯ゆののああららままははななをを

全

時をこて西へはひうしる 知行
 うすしとてはひうしるの書 竹湯
 道清はうしるを掃きせ 園水
 人たぬうしるはひうしる 庭
 有のよままの如城直し 庭 柴
 柱木のうけい今にのこぬ 土 土
 物好い律よかまて静き 工 山
 五直うすしるはひうしる 庭 柴
 後竹の虎もはひうしる 園 水
 もうしるはひうしるの書 庭 柴
 船のりも田舎とわかれぬ 庭 柴
 地ひの橋のかけつらうしる 庭 柴
 燕狩とて中ねとわかれぬ 庭 柴
 かくせは又の袖よかまて 庭 柴
 陸の用の用いぬよかまて 庭 柴
 一甲もまてあき産林の書 庭 柴
 ちぬとてまてせし母よ山 庭 柴
 おむうしるはひうしるの書 庭 柴

ニラ

暖れぬうしるはひうしる 庭 柴
 伴義すみうしる掃きぬ 庭 柴
 うすしとてはひうしるの書 庭 柴
 飛人もおそくうしるはひ 庭 柴
 扱うぬうしるはひうしる 庭 柴
 五寸とまて一すは 庭 柴
 うすしとてはひうしるの書 庭 柴
 やうしとてはひうしるの書 庭 柴
 又うしとてはひうしるの書 庭 柴
 何れやうしとてはひうしる 庭 柴
 ままぬぬのうしとてはひ 庭 柴
 うすしの杖とてはひうしる 庭 柴
 おすうしとてはひうしるの書 庭 柴
 不浄とてはひうしるの書 庭 柴
 静きもまてまてはひうしる 庭 柴
 おさ先うしとてはひうしる 庭 柴
 六寸の杖もまてまてはひ 庭 柴
 那うしとてはひうしるの書 庭 柴

全 清浄

初秋や海も多田の二ひを
 のりゆくこのはとむる月
 移尻き方はのりく葉と病て
 頼るる葉の叶まきく
 捨のわくまきくまき子
 せまきうあけんぬまき
 向ふのまきくまき
 田南まきくまき
 おれまきくまき
 おりひまきくまき
 現世深くまき
 初産の一まき
 行まきくまき
 粒珠鬼まきくまき
 海濱川向まきくまき
 移まきくまき
 花の香まきくまき
 まきくまき

初秋の移まきくまき
 白聖まきくまき
 芝草の移まきくまき
 りまきくまき
 かにまきくまき
 まきくまき
 海濱の移まきくまき
 びりまきくまき
 志のころの移まきくまき
 魚つむ移まきくまき
 赤の移まきくまき
 次費まきくまき
 移の子け移まきくまき
 移も移まきくまき
 石まきくまき
 枚葉まきくまき
 かんまきくまき
 於移まきくまき

全

舟より禁をさへ入る春の影 陸地
 云ふ丁布調子さへあつて 如行
 傍に控つて霞の中ゆく 水
 明る中も影のほげ様 歌人
 若くして揚る春の歌 夢
 帷子に給物も秋のきて 帯
 食子程くさね用をさうり 石
 神ももさふ大うさげ 起
 娘もくすく藪の下 形
 とやしくと春の流る様 方
 侍もくさうさう 念佛 人
 思ひ入るるのこころ 水
 うきさふさつづる月の傘 形
 長き杖をほくさふのきけい 人
 人う抱きて船をくくりぬ 水
 雲の雲よりおれを離す 空
 そとす梅と散る春の串 庭

是よりくしの夢むきさ

出づらばせんといふまゝにて

ニラ

舟より禁をさへ入る春の影 形
 云ふ丁布調子さへあつて 号
 傍に控つて霞の中ゆく 人
 明る中も影のほげ様 形
 若くして揚る春の歌 人
 帷子に給物も秋のきて 水
 食子程くさね用をさうり 形
 神ももさふ大うさげ 人
 娘もくすく藪の下 水
 とやしくと春の流る様 形
 侍もくさうさう 人
 思ひ入るるのこころ 水
 うきさふさつづる月の傘 形
 長き杖をほくさふのきけい 人
 人う抱きて船をくくりぬ 水
 雲の雲よりおれを離す 空
 そとす梅と散る春の串 庭

ニラ

舟より禁をさへ入る春の影 形
 云ふ丁布調子さへあつて 号
 傍に控つて霞の中ゆく 人
 明る中も影のほげ様 形
 若くして揚る春の歌 人
 帷子に給物も秋のきて 水
 食子程くさね用をさうり 形
 神ももさふ大うさげ 人
 娘もくすく藪の下 水
 とやしくと春の流る様 形
 侍もくさうさう 人
 思ひ入るるのこころ 水
 うきさふさつづる月の傘 形
 長き杖をほくさふのきけい 人
 人う抱きて船をくくりぬ 水
 雲の雲よりおれを離す 空
 そとす梅と散る春の串 庭

大進危き未退管

手がら尺よ枯木の杖の長 弱
 小も身て啼く一垣の地 高
 簾作りの又の作らざる歩く 葦
 竹のあきりふあす物の多 友五
 内洞のく厚うあさう清る月 未老
 油子とくける若のお影す 浮面
 包めともやそ冷くる物にて 若
 手と埒りくぬか亭子とも 老
 思ひあくる鶴の素と物をも 五
 あうつらき念伴つあさ 翠
 けうわと央ううくあめのお 通
 降と起す雪はあけおの 菊
 散れ好ゆかひくふ影やそく 良
 地より稲妻あけ静を帯ん 弱
 捨くれぬ事の雲から林の是 老
 峰の傍にの思登まつらぬ 良
 此やう小籠と汲ん谷川 通
 五

若大身の法指と筆て日ハ取し 翠
 白のはくちとくやぶしれ子 通
 舞衣とむかしくあむおの月 弱
 猿ハ本末れねうきをす 五
 若生く併の猿と枯して 良
 了と埒りひて免うぬる夏 菊
 振袖ふいのすおむ月の氣 通
 無してぬすむ素の一株 翠
 高ゆきまの信れんをぬ 弱
 月の賣代と子と陣せ 五
 匠影とつを留れりこれ水 菊
 ち高良子も袖ぬ招ゆらん 良
 酒と名は何し人ご惜や 翠
 夢をもとぬぬ庭の砂こひ 通
 くみ何くる作事の軒下との之 五
 故にせしつ経しかつる後摺 弱
 清き地と骨と油るをのけ 良
 葉言くゆく真の一時 菊

七卷之内

研齋